東日本大震災と被災・避難の生活記録

表題は2015年3月に六花出版から刊行された770ページを超す大著である。編者は吉原直樹・仁平義明・松本行真の3氏であり、多くの社会学研究者が執筆している。緻密な調査にもとづいた「生活記録」であり、3・11に関わる重要な論点も提示されている。

本書は第Ⅰ部 復興とまちづくり、第Ⅱ部 コミュニティ・ネットワーク・ボランティア、第Ⅲ部 被災後の生活と情報、から構成されている。ここでは、編者の吉原直樹氏の「序」の一部を紹介したい。吉原氏は2013年11月に岩波書店から『「原発さまの町」からの脱却―大熊町から考えるコミュニティの未来』を刊行している。研究会で吉原氏の刺激的な報告を聴き、この本からも多くの示唆を得た。

ここは復興の起点に立ち返って、いま一度、避難を強いられた人びと、職を失った人びと、生業を奪われた人びと、機能移転を余儀なくされた市町村役場、そして被曝に脅え続ける人びとの「いま」を浮き彫りにする必要があるのではないだろうか。考えてみれば被災直後、政府サイドから頻りに聞こえてきたのは、「想定外のできごと」といった声である。今回の東日本大震災は1000年に一回の地震であり、途方もない津波は想定外のできごとである、と。こういった声が国の責任(そして福島でいえば、東電の責任)を曖昧にしてしまったことは否めない。国そして東電は、未だ避難者が納得するような謝罪も、事故原因・現状の説明も行っていないようみえる。こうした謝罪および説明がなされてはじめて避難者の生活の回復/再生への道がきり拓かれるのではないだろうか。しかし残念ながら、現状はただ「経済」復興だけが先行しているようにみえる。詳述はさておき、復興の起源に遡って復興の正当性と方向性を問うことこそが、いま問われているのではないだろうか。

同時に、ここで指摘しなければならないのは、一瞥したような復興施策の多面的な検討とともに、避難者の「いま」を生活世界の相から追い上げていくようなモノグラフ(調査報告)の作成が求められていることである。なぜなら、今日われわれの前にたちあらわれている復興施策は、あまりにも人びとの生活世界の実相からかけ離れているようにみえるからである。

ともあれ、地域の側に立ち、避難者の生活の回復/自立を可能にする復興を達成するためにこそ、避難者の生活世界の変容の諸相をあきらかにする必要がある。本書は、こうした問題意識をゆるやかに共有しながら、それぞれの執筆者がフィールドの世界で織りなしたモノグラフ、そしてそこで得た知見を集成したものである。

(2017年2月11日)